

ソーシャルワークの価値と倫理

太 田 義 弘*

Values and Ethics in Social Work

Yoshihiro Ohta

Abstract : It has always been recognized that values and ethics in social work practice raise questions and dilemmas in the field of education and practice. Recently, however, traditional ways of thinking about them are changing and seem to be inadequate, because of developments both in philosophy and in social work theory and practice.

This paper aims at arranging the subject of confused values and ethics in social work, and asserting the philosophy of social work clearly. Therefore, the contents consist of the following.

- I Introduction
- II Values and ethics in social work practice
- III The viewpoint of the research on values and ethics
- IV Social work philosophy as values
- V The consideration of practice ethics
- VI Conclusion

Key words : 価値と倫理 values and ethics 社会福祉哲学 social work philosophy
ソーシャルワーク実践 social work practice

I はじめに

価値と倫理とは、有史以来の人類にとって永遠の最重要課題である。地球上に命を与えられた生き物のなかでも人類は高度の知能を授かってきた。それによって長い社会生活を通じて固有な価値と倫理が育まれ、それらが人間を人間らしく固有な意味をもって存在させてきた。そして価値と倫理が人心に内在化されることから、隣人を慮り、叡智を共有して歴史を重ね、文化を育み文明を発達させてきた。それらの知恵が形成してきた価値観を行動規範に具体化したものが倫理である。

社会福祉が施策として制度化されるのも、実践活動として行動で具体化されるのも、その根源には蓄積されてきた価値の実現に他ならない。近年の社会福祉の動向は、価値の普遍化から価値の実現へと進展してきている。それは制度や政策としての社会福祉という価値の普遍化から、価値の課題を利用者の視点より現実や実感として享受できる社会福祉へと焦点が移行してきたことを意味している。

それは社会福祉の究極目標が、諸施策の整備を前提に利用者中心の生活世界から課題解決や自己実現を支援することにあるという認識へと開花してきたことである。その価値実現への実践活動がソーシャルワークである。そのために社会福祉の価値と倫理は、広く福祉社会の思想

*関西福祉科学大学社会福祉学部 教授

や文化として共有・敷衍されねばならない一大課題であるが、それはソーシャルワークと結実してはじめて実効が具現化されるといわねばならない。

価値は実践への理念や原理を形成し、実践倫理へと昇華され方法や技術の根底を支える動機や実践行動の課題として存在している。そして何よりも教育・研究や実践に従事するわれわれの日常的生活態度や信念、専門性や行動力で具現化されねばならない永遠の課題である。

このような視点から、社会福祉の理念や目標の根源である価値の課題を、ソーシャルワークという支援者の行為に具現化される実践倫理の課題に焦点化して考察してみたい。

Ⅱ ソーシャルワーク実践の価値と倫理

思想や理念、制度や政策としての社会福祉は、その時代の価値を反映したものであることはいうまでもないが、その施策としての価値概念を実践活動や行動に具体化するとき厳しく問われるのが価値と倫理の課題である。その意味で価値や倫理の課題は、制度・政策に反映される課題ではあるが、何よりもその真髄は、実践活動としてのソーシャルワークという専門的な実践行動概念でこそ具体的に考察される課題である。その価値や倫理が具現化するソーシャルワークの展開をめぐり、その前提には無視することのできない現実や問題が山積している。それらは次のようなものである。

- (1) 価値と倫理考察の背景
- (2) 価値と倫理教育の問題
- (3) 価値と倫理研究の課題
- (4) 価値と倫理を反映した実践の課題

これらの問題や課題について少し言及しておかねばならない。まず実践をめぐる価値と倫理への前提をなす背景や状況について考察しておかねばならない。

1 価値と倫理考察の背景

実践への価値と倫理考察の背景として、次の

ような大きな問題や現実のあることを念頭に置いておかねばならない。

- ・実践倫理綱領の未確立と共有への問題と課題
- ・実践倫理をめぐる本音と建前の因習
- ・馴れや勘と経験に依拠する実践の世俗性とである。

第1の実践倫理綱領の未確立と共有の問題については、実践に共通な価値理解が次第に浸透し、それらを反映した実践倫理の綱領化に向けて幾つか試案が提示されるようになってきているが、実践者や教育研究者の間で十分検討され熟成するまでには至っていない。まだ試行の段階で共通理解から倫理綱領の確立は、これからの課題であり、それらをふまえて実践倫理の共有化の課題が登場することになる。このような前提をめぐる課題がある。

第2が、因習や国民性としかしいようなない共通した生活態度が指摘できるが、それは本音と建前を状況によって使い分ける独特な雰囲気である。総論賛成で各論反対、公私と陰陽などの異者併存の姿勢や態度が、微妙なバランスのもとに介在している現実があり、実践倫理を受け止めても骨抜きにし共通規範にさせない因習もある。

第3に、社会福祉の実践ということでは、善意や奉仕という篤いものを連想させられるところから、馴れや勘と経験から培われてきた属人的な信念を重視する傾向が強いことも否定できない。実践倫理とは、時代の普遍的な価値意識に裏打ちされた科学や専門性による実践行動概念の規範となるものである。そのために身近な勘や経験のみを信奉する世俗的な実践活動へと埋没している現実も忘れてはならない。

2 価値と倫理教育の問題

前述の価値と倫理の背景をめぐる問題は、当然のことながら実践への価値や倫理教育にも多大な影響を及ぼしている。これは家庭教育や社会教育から学校教育までをも包摂した問題では

あるが、それらをふまえた専門教育としての社会福祉教育においても価値と倫理は実践教育の出発点であるといわねばならない。そこに問われる課題を大きく以下のように指摘をしておきたい。

- ・実践教育の原点としての価値と倫理教育
- ・実践倫理教育と訓練方法の課題
- ・実践倫理をめぐる宗教教育への視座

まず第1が、実践教育の原点ともいえるべき価値と倫理の教育をどうするかということだが、その重要性について総論としては異論がないものの、その方法としては暗中模索という状態である。そして現実には学習者の主体的な理解や感受性の問題と片づけられていて、学習者側の経験や学習に多大な期待はするものの、価値と倫理教育の意義や目的、教育方法や計画などの具体化は、まだ今後の課題である。後ほど触れたいと思っているが、特に教育研究者は、教育の場面で単なる価値や倫理の解説者ではなく、自らの社会福祉哲学を整理し、積極的に公言する必要があると考えている。

第2に、現実の社会福祉教育のなかで位置づけられている実践倫理教育らしき方法は、カリキュラムの上で実践技術や技法の一端としてしか教えられていない。そのために学習方法や学習教材もほとんど整備されておらず、社会福祉思想や実践原理の解説や技術・技法の展開として暗中模索の状態である。何よりも生きた教材といえる社会福祉実践者像を彷彿とさせる人物、それは社会福祉哲学を言動で具現化できる教育・研究者あるいはソーシャルワーカーを育てねばならない。評論家として観念的に批判し理想を論じるものの、自らの生きざまとして実践倫理を体現できる姿勢や態度をもつ人物が残念ながら希少だという問題もある。

第3に、価値や実践倫理教育には、その人自らの関心や学習から学び取った経験や価値意識が不動の影響をもつものである。人が思想や信条を堅持する背景には、必ず動機や理由があるが、それはあまり論理的、客観的でないこと

が多い。それほど合理的、理性的に生きているわけではなく、その人らしく周りとのバランスをとりながら実存的に生きているからである。社会福祉を語るとき、その人の思想や信条が問われるのだが、客観的に理路整然と理論武装した信念を述べるものの、その根底にはこのような人間的な心情が横たわっている。それは論理の合理性や妥当性よりも、出会う人や師、書物などを通じての人間性がそれを決定するようにも思える。価値観とは、そのようななかで形成されてくるもので論理ではなく経験に負うところが多い。

かつてわが国の社会福祉教育機関は、伝統的に宗教を建学の精神にしてきたところが多く、教育者の信仰を社会福祉哲学の礎にした生きざまから利用者や社会福祉の現実を理解する姿勢や態度を学び、学風といおうか体質にしみこんだ価値観を陶冶してきた。近年はこのような精神や学風がすっかり風化してきている。改めて宗教教育の再興に期待するところが多い。

3 価値と倫理研究の課題

教育の問題とともに価値や倫理研究にも課題が多い。そこで価値と倫理研究の再興のために、次のような課題や視点を指摘しておきたい。

- ・価値と実践倫理研究の敷衍と課題
- ・社会福祉実践哲学への視野と発想
- ・実践研究としての価値と倫理研究

その第1が、価値と実践倫理研究の敷衍と課題であるが、まずこれらの研究への呪縛を解放する必要がある。例えば価値や倫理を生活の中に具体化した道徳教育にしても必要性は期待されても、学校教育の中では強い批判や大きな抵抗を受けてきた。いうまでもなく富国強兵の精神的支柱になった国家神道と軍閥への思想的な反応である。敬神国民といわれた日本民族がもつ固有の伝統的な宗教的实践と、それを反映した生活態度や理念は、自然発生的なアニミズムやシャーマニズムとともに氏神や国祖神などの

崇拜から大和朝廷による国家的祭祀を経て、明治の国家神道への道を辿ってきた。

仏教や儒教の影響を受けながらも仏教やキリスト教という外来宗教とは異なり、国家神道は戦前・戦中の道德教育の根幹を担ってきた。道德教育の停滞は、その残滓への懸念や抵抗である。このような経緯から価値や倫理研究も停滞してきたといえることができる。

かつてのような急進的なナショナリズムの高揚に宗教が悪用されては困るが、その反動で革新思想に基づく国家体制批判だけでも実践の価値や倫理は生まれてこない。価値や倫理の研究は、自らの経験や信念の世界における課題である。したがって無色透明で没価値的な価値や倫理研究はあり得ないが、固有な体験学習に基づく価値実現への行動があつての価値研究である。その目標は、価値や倫理を实践原理と活動に具体化できる研究でなければならない。

第2に、ソーシャルワークに従事するものが、どれほど重大な価値を担わされた職業に奉職しているという自覚を抱いているであろうか。それは個人的な善意や感傷の世界の問題ではなく、社会の大きな期待と責任を負っていることへの深い洞察である。

そのためには専門職業者としての社会福祉哲学の確立が不可欠であり、その価値意識に基づいた専門職業者の姿勢や態度が、ソーシャルワークの価値や倫理を標榜することになる。その社会福祉哲学とは何なのか。もちろん方法や技術の根源をなす価値としての原理や思想ではあるが、次のようなことを指摘することができるだろう。

社会福祉哲学は、ソーシャルワーク実践をめぐる基本的な考え方であるが、社会的に共有される客観的な価値意識と、その人固有の主観的認識に基づく価値概念の総称である。歴史的には、哲学から宗教や科学が独立することによって、人間や世界の原理や本質が探究されるようになってきた。そこに独自の思考体系を構築してきた学問が哲学である。

それは考察の対象を思考過程から論理的に把握する認識論、実体の意味や存在を立証する存在論、人間行動の基本的倫理を考察する実践論から、実体を感覚的に理解する感性論などの分野で、人間の意識や思考、行動に多大な影響を与えてきた。そこで社会福祉哲学とは、個人が経験してきた人間や社会、社会福祉に対する固有な姿勢や態度さらに行動からなる価値基準や意識であるといえることができる。

ソーシャルワークへの価値と倫理研究に先立ち、自らの社会福祉哲学が求められているということである。すでに公表してきたものであるが、改めて筆者自身の社会福祉哲学として人間理解と社会認識、社会福祉への価値意識から実践としての支援への価値意識を後章に掲げておきたい。

第3は、ソーシャルワークの価値と倫理研究は、机上の原理や方法ではなく、参加と協働の実践活動そのものの展開から、実践原理や展開方法として考察されねばならない。逆説的に指摘するならば、ソーシャルワークの価値や倫理が、抽象的な原理や原則、目標や理想を目指した方法や技術として考察されていることが問題である。

それは価値や倫理という理論や原理を行動に具体化する方法研究の必要性が緊急な課題であるところから、観念的な価値や倫理研究ではなく、臨床的な場面での実証研究あるいは実践研究が鶴首されているということになる。

4 実践での価値と倫理の課題

ソーシャルワークの価値と倫理をめぐる最大の課題は、利用者と出会う実践の場で、価値と倫理が如何に発現し、支援という行為で具体化されるかという課題である。換言すればソーシャルワーカーの専門性を形成する大前提になる課題である。価値と倫理を考察することの究極目標は、他でもないここにあるからである。

この実践活動の領域においても価値と倫理の具現化には大きな課題が横たわっている。ここ

でも次のようなことが指摘される。

- ・ 属人的特性に依拠した実践倫理
- ・ 実践倫理が支える高度の専門性
- ・ 高度の実践倫理が問われる実践現場

などの諸点をめぐる課題である。

第1の属人的特性に依拠した実践倫理という課題は、ソーシャルワークのもつ人間の社会生活を支援するという宿命的な特徴が招来する問題でもある。広く社会福祉ということがらが、歴史的にも古くは精粹な価値観や崇高な倫理観をもった篤志家の活動であったことから、改めて従事者の価値や倫理が当為のこととして不問にされてきた。近代社会の到来とともに、社会福祉が職業として社会化されるにしたがい属人的な人間性が問われるようになってきた。

それは崇高な属人的特質をもつ人にのみ許される社会的役割や職業ではなく、利用者の現実を身近に共感し支援するためには、多様な資質や特性さらに経験をもった人材が参加し、職業教育を通じて人間性を陶冶することこそが、共生社会のあるべき姿だとして、社会福祉教育に多大の期待が寄せられてきた。しかし、他方では当然のことながら価値や倫理教育は、人間教育そのものでもあり、知識や技術の獲得とは別に価値概念を倫理行動に開花させることは容易なことではない。そのために価値や倫理、専門性を欠いた属人的な判断に依拠した実践活動に埋没している従事者も少なくない。

第2は、専門性の課題である。三大有識専門職業といわれる医師・法律家・宗教家には長い教育・研究・実践の歴史があり、知識と技術を支えるための厳しい価値教育が科せられている。日常生活においても職業倫理と社会的責任を意識した行動が期待されている。このように高い専門性を有する職業ほど厳しい倫理綱領をもち、価値教育を重視してきている。もちろん例外的なスキャンダルはマスコミなどで報道され社会的に批判されるところであるが、それなどは逆に高い専門性と厳しい倫理規範が求められ、期待されているからである。

ソーシャルワーカーという職業の専門性に対する理解や社会的声価は、目下のところ決して高いものではない。しかし、日常生活での幸・不幸、生き方や存在という人間の尊厳にかかわる課題を支援するソーシャルワークが、勘や経験あるいは馴れのみに依拠した活動では社会的な期待に応えられない。何よりもソーシャルワーカー自身の訓練と研鑽を通じた職業倫理の確立と高揚が求められるところである。

そして第3に、ソーシャルワークの社会的声価の高まりは、第一義的に他律的な条件整備に期待するのではなく、本来ソーシャルワークという実践活動の場面を通じて利用者から獲得する信頼と評価に他ならない。しかし同時に、それは実践の最先端で利用者にかかわるソーシャルワーカーにのみ一方的に科せられた役割や責任ではなく、他方では教育や研究にかかわる社会福祉教育者の責任でもある。

ソーシャルワークの価値や倫理が反映された特徴ある実践活動を通じてソーシャルワークの専門性は深化し敷衍することになるが、そこには教育研究者の襟を正したソーシャルワークに対する姿勢があることはもちろんのこと、社会福祉施設や機関の管理・運営体制や社会福祉行政の姿勢や対応も問われるところである。そして、さらに政治や社会ということでは利用者を含む住民の社会福祉に対する理解や参画も問われるところである。

Ⅲ 価値と倫理考察への視点

ソーシャルワーク実践の価値と倫理をめぐり教育・研究・実践などの前提になる課題を考察してきたが、次に価値と倫理そのものへと考察を進めなければならない。ソーシャルワークの価値とは何なのか。そして価値と倫理とはどのような関係にあるのかについて触れておかなければならない。

それは価値や倫理の意義や目的、特性や方法を如何に詳細に分析・考察し解説・評価しても、価値や実践倫理が目指す実効に直結するわ

けではない。重要なことは、価値や実践倫理を日常的な実践活動のなかに如何に生きて働く実践力として具現化するかということにある。そのために価値や倫理を反映した原理や原則から方法や技術にいたる課題が社会福祉教育のなかで建前として語られているが、それだけでは不十分である。あるいはまた実践事例から how to ものの実践方法や支援行為を学習させるだけでも物足りない。

価値と倫理を自らの課題として如何に内在化し、専門家としての信念に基づく態度を確立することが可能か。そのためには課題意識に応えることを念頭におきながら、本論考の目的を、ひとまず価値と倫理概念の考察から、両者の特性への比較考察をふまえて、両者の関係や位置づけを検討し、さらに次章で自らの価値意識をソーシャルワーク実践哲学として明言することとしてまとめてみたい。

1 価値概念

そこでまず、ソーシャルワークの価値概念については、実践活動の根源として多くの研究者が解説をしてきているところであるが、「基本的な人間の要求を充足し、個人的にも社会的にも人びとに役立ち理想的であると考えられる望ましい目標や究極的な状態に対する態度」¹⁾といえる。基本的には The National Association of Social Workers が倫理綱領で提示してきたものによると、「特に臨床実践と関連させて3つのことがらとして、①個人の尊厳性、②個人の固有性、③自己決定の権利」²⁾であるとまとめられている。また専門職業としての価値の観点から、①人間の尊厳性や真価と②民主的で社会を慮った立場からの要求の認識である³⁾とのまとめもある。

さらにソーシャルワークの価値を表す鍵概念として、①使命を担われたソーシャルワークの特性、②利用者や同僚、社会の構成員との間に展開される関係概念、③ソーシャルワーク実践としてのインターベンション活動の固有な方

法、④実践場面で問われる倫理的なディレンマとの対決と解決など⁴⁾の立脚点であって、場面や状況で価値を不問にして実践が成り立たないと指摘されている。これらが依拠する源泉としての価値から、ソーシャルワークの原理や原則が存立していると考えられている。ソーシャルワークの価値とは、実践に対する信念に基づいた態度であるところから、それらは、①絶対的、②手段的、③個人的、④社会的、⑤宗教的・霊的、⑥科学的、⑦専門的⑧道徳的、⑨倫理的、⑩美的価値などと分類⁵⁾される内容で解説されている。

一方で、このところの加速度的に激変してきている社会の変動と人間の生活する姿勢や態度の変化に対応して、価値の多様化と固有な歴史的文化を重視することから、欧米における伝統的な価値や倫理の見直しを示唆する発言もある。ソーシャルワーク実践としての価値や実践倫理についての蓄積してきた研究業績を紹介・検討しながら、今日的な新しい視野から、それらを見直すという提言などには無視できないものもある。⁶⁾

しかし、歴史を越えて伝統的に支持されてきているのが、全米ソーシャルワーカー協会によってソーシャルワークの核心的な価値として紹介されている観点である。超歴史的ということでは抽象性に富んだ観点であるが、①サービス、②社会正義、③個人の尊厳、④対人支援、⑤誠実性、⑥コンピテンスとが共通理解⁷⁾されてきている観点である。それらをふまえて実践倫理は、職業人としての社会的行為の枠組みや方法からなる倫理綱領や技術・技法の指針を提供してきている。価値は、ソーシャルワークの基本ともいえる実践哲学としての理念や原理を意味し、倫理とは、それらを前提に実践方法への具体的枠組みや内容と理解されている。このように価値と倫理とは、一体をなす概念として扱われ、実際には相互にこれらの説明概念として交錯した活用のされ方で存在している。⁸⁾

2 価値と倫理の特性比較

次の表1は、ソーシャルワーク実践の価値と倫理についての錯綜した概念を整理したものである。価値と倫理との関係や両者のニュアンスを特性として対比させ、比較考察しようとするものである。

そこでまず価値のカテゴリーについて、価値とは、実践倫理と対比しながら考察すると、その特性が見えてくるが、その時代の「思想」として共有されねばならないものである。それは広く社会福祉の「理念」を明示するものでなければならない。それを受けてソーシャルワーク実践の「原理」が確立されたものになり、さらに実践の「目標」として掲げることができる価値へと熟成する。それはまたソーシャルワーカーという実践行為者の「信念」として専門家の意識に内在化されるとともに、これらの特性をもつ価値は、広く社会に意味をもつ「公理」として存在することになる。

また倫理とは、価値特性を前提にして、広くその意図を反映した思想の具体化としてソーシャルワーカーに対する実践行動への「規範」という特性をもつことになる。倫理は、まさに価値としての理念を「実践」場面で具体化する行為につながるものであるし、それは実践の原理に対して「方法」を枠組みとして明示するとともに、さらに価値としての目標を実践活動へと展開する行為「基準」の明確化を意味している。その倫理基準にしたがってソーシャルワーカーは支援活動を専門的な「行為」として、信

念をもって実践することができるのである。また実践倫理とは、時代を反映した公理としての価値を背景に、専門的な方法・技術の展開「条理」としてソーシャルワークという支援活動を社会的に明言することでもある。

3 価値と倫理研究の原点

考察してきたように価値と倫理との特性比較から、それらのソーシャルワークにおける位置づけを図1ように描くことができる。

この図は、いうまでもなく予てより主張してきた視野や発想という筆者固有のソーシャルワーク実践概念と実践パラダイムをビジュアル化したものである。発想の基点は、広く曖昧に理解されてきた社会福祉概念を伝統的な政策科学として位置づけるのではなく、実践科学としてソーシャルワークという視野や発想を基点にして、支援を目標にした支援科学としてのソーシャルワーク実践を追究しようとするものである。

これはまさに社会福祉の課題を政策科学や社会科学として考察するのか、それとも実践科学や人間科学さらに支援科学として考察するのかという価値の課題との対峙から分岐することになる。既に機会あるごとに指摘してきたところであるが、広く社会福祉の究極目標は、施策の整備を前提にして利用者自身による課題の解決と自己実現を支援するところにある。しかし、わが国の社会福祉研究は、伝統的に前提のハード福祉策定に奔走・終始し、ソフト福祉を派生視してきた。これはまさに社会福祉の課題を何に焦点化して考察するのかという価値意識が問われていることでもある。

社会福祉という施策や制度からなる箱づくりで社会的な仕組みを理想的に改善・構築する発想や研究、つまり社会志向を基点にしたアプローチは、比較的明解な解答が引き出せるのに対して、一方では人間を出発点にした研究は、木に目を奪われ森を見失った研究から、観念的な人間福祉研究などへと拡散してきた。ハード福

表1

ソーシャルワークの 価値と倫理の概念特性			
価値		倫理	
思想	理想	規範	実践
原理	意図	実力	方法
目標	目標	基盤	基準
信念	意図	行為	為理
公理		条理	

祉という施策を条件や手段に社会福祉の内実を利用者の立場で価値実現する発想や研究、つまり人間志向の実践アプローチは、生活する人間という実存的で不可解な存在とのかかわりから、遅々とした歩みを続けてきた。その前提をなす未知で至難の課題克服には、幾重もの緻密な研究の蓄積が必要であったからである。

この現実は今日も継続しているが、しかし社会福祉の究極目標が、理想や理念の拡大・整備から施策の拡充と浸透にあるのではなく、それらを前提条件に人間の社会生活での価値実現にあることを錯覚してはならない。このところ臨床ソーシャルワーカーはもちろんのこと、多くの教育研究者が次第に実践研究に関心を寄せるようになってきた。そして次第にソーシャルワーク実践研究が、社会福祉研究の主流になる兆しが拡大してきている。これも社会福祉の基本を考察する伝統的な「価値意識の転換」ということができよう。

改めて先行する価値や倫理研究の内容や動向を詳察してみると、その焦点が人間へのアプローチを基点にしていることが再認識できる。これからの社会福祉研究の原点は、発想を転換した人間の生活とそれへの支援を研究の焦点にしなければならない。つまりソフト福祉としての実践研究から始まらねばならないということである。しかし、それはまた支援活動研究からさらに実践のフィードバックを通じた過程研究の推進によって、制度や政策さらにサービス計画や運営が、再構成され改革されるという実践研究としてのマクロ施策研究の再構築も内包されたものでなければならないことを意味している。

4 価値と倫理のコンステレーション

ソーシャルワークの価値と倫理研究から再認識させられることは、ソーシャルワーク実践研究が、究極目標としている人間の生活支援という課題をめぐり、もっと人間とその環境へのアプローチに執心しなければならないということ



図1

である。

そこでソーシャルワークという利用者支援への活動から、価値と倫理についてのイメージをコンステレーションとしてまとめると以下のようなことになる。

まず図1の上部から、ソーシャルワーク実践は、外枠として時代思想を反映した「広義の価値」、例えばヒューマニズムや人権などの理念を大前提に、それらの時代の成果を背景に政治や経済から、科学や技術などの時代考証としての文化や文明に支えられている。次の中間枠には、それらが社会福祉の背景へと絞り込まれ、「社会福祉の価値」ともいえる共生やノーマリゼーションあるいは参加や協働などの福祉文化からなるソーシャルワーク実践の価値が醸成される。その枠には、一方で社会的視点よりの社会福祉の計画や施策、行政や財政よりなる方策が、他方では、科学技術の成果に支えられた人間と環境より構成される生活への視座や知識によって、ソーシャルワーク実践が構成されることになる。

そして核心枠に、支援科学としてのソーシャルワークの方法論、生活支援というソーシャルワークのアイデンティティを理論や方法にして、利用者支援が進展していくことになる。この生活支援の過程を推進する価値に支えられた専門家の行動規範と実践行為が、ソーシャルワークの実践倫理に固有な意味を与えている。そ

れは利用者との参加と協働過程でソーシャルワーカーのもつ技術や技法として発現するとともに、ソーシャルワーク実践の固有性を構成している。

ソーシャルワーク実践の固有な特性を位置づける価値・知識・方策・方法という構成要素の構造と対比して、価値をソーシャルワーク実践の大前提に、知識や方策を手段に、実践という支援方法に具体化された実践行為の根幹をなす概念が、この実践倫理である。

Ⅳ 価値観としての社会福祉哲学

ソーシャルワーク実践研究が、このところ非常に重要視されるようになってきた。それと呼応して重要な課題である実践の根底をなす社会福祉の哲学が問われている。思想や文化の進展とともに価値意識や生活態度が変貌する一方で見過ごしてはならないのが、人間・社会・支援・福祉などへの共通理解が欠落してきていることである。

実践の価値や倫理をめぐる意義や目的・概念の解説や紹介は盛んであるが、自らの価値意識についての論及はほとんどなく、著作者の論述内容を第三者が考察・評価している場合が大半である。改めて自らの社会福祉哲学を披瀝することには躊躇を覚えることもあるが、ソーシャルワーク実践への教育・研究・実践者には、切実に問われている課題である。筆者は、既に自らのソーシャルワークへの価値意識を及ぼすながら披瀝⁹⁾してきたところであるが、それらを整理して再度論及してみたい。

1 ソーシャルワークへの実践哲学

ソーシャルワークへの実践哲学とは、自ら培い構築してきたソーシャルワークの意義と目的、実践方法を明言することである。実践哲学とは、社会的に共有される客観的な価値概念と自己特有の主観的認識に基づく価値意識の総称である。ここでは、それらから経験学習を通じた各個人の人間や社会福祉に対する一貫した姿

勢や態度、行動からなる価値基準や意識であると理解しておきたい。それは先にも触れてきたように、人間と社会についての認識論や存在論、実践論、感性論などからなる価値意識である。そこには人間の意識の根底に認識の前提をなす宗教や、事実を解説する科学との不可分な関係が存在をしている。

そこで、まず何よりも問われるのが、人間と社会に対する価値意識と、それらに基づく社会福祉と支援への価値意識である。これらへの目標や理念、建前である価値概念は、既に思想や文化、あるいは具体的な制度としてすでに共有されている。しかし、これらが如何に普遍化されようとも、問題は、個々人が自らの課題として日常生活のなかで、これらの価値概念を価値意識として具体化した姿勢や行動をとれるかということである。理想や努力目標ではなく、本音の真摯な態度そのものが問われていることである。それは自らの価値意識を問うことであり、それを明言することに他ならない。

2 人間理解への視点

改めて自らの価値意識を問うということでは、誰しも面映ゆいものを感じないわけではない。人間が、思想や信条をもつようになるには、必ず理由がある。しかし、それはあまり論理的、客観的でないことが多い。価値観とは、そのような中で形成されてくるもので、信念とは論理ではなく、経験に負うところが多いといえる。

思想や信条を抜きにして人間や社会、福祉を語ることができないが、自らの価値観が問われるときに、客観的に理路整然と理論武装した信念を述べようとする。しかし、その根底には、人間的で情緒的な経緯が横たわっていることに気づかせられる。論理の合理性や妥当性よりも、出会う師や友垣、書物などを通じて培われた人間性が、それを決定するようにも思える。

そこで、自らの価値意識を、以下のように人間と社会、さらにソーシャルワークを構成する

支援という視点から、改めて箇条書きにしてみとめておきたい。

その第1が、人間についての価値意識である。

- (1) 人間は、身体的・精神的・社会的・霊的特性よりなる独特な生命力をもつ唯一無二の存在であること
- (2) 人間は、不可侵の尊厳を付与されているとともに、固有な存在価値を保有し、それを実現する能力をもっていること
- (3) 人間は、自己実現への可能性を追求する自由をもつとともに、自らの社会的行動には、全幅の責任を負っていること
- (4) 人間は、時代の成果を享受した生活を追求する権利をもつとともに、豊かな社会づくりに参加し、協働する義務を負っていること
- (5) 人間は、生活過程で出会うさまざまな経験から学習を蓄積し、つねに変容し成長する能力をもっていること
- (6) 人間は、生活過程で遭遇する問題や危機状況に対処・克服して、日常生活の均衡を維持する適応能力や社会的自律性をもつ創造的な存在であること
- (7) 人間は、日常生活の場面で、論理的・合理的な行動をつねにするものではないが、現実場面の中では独自の選択と決断ができる能力をもっていること
- (8) 人間は、現実場面でのコミュニケーションを通じて、相互に理解を深めることが可能な実存的存在であること

と指摘しておきたい。

特に、価値意識としての人間理解については、伝統的な生物的・心理・社会的・文化的理解はもちろんのこと、霊的・宗教的理解の必要性も強調しておかねばならない。人間の尊厳、権利と自由と責任という基本的な価値は、当然のことながら、さらに人間と環境を含めた生活世界 *cosmos* のもつ可能性や潜在能力への期待と評価、それを意味する固有な社会的自律性 *competence* を強調しておきたい。また現象学

的な発想や実存の人間理解に関心をもっていことはいうまでもないが、その根底には宗教的な信仰や実存的な思想を重視したいという願望があつての人間観である。自ら固有な命という必然性を付与され、存在の意義を認められた人生には、重大な人と社会に対する責任が負わされているという自覚である。このような姿勢や態度から人間支援への信念としての価値意識をまとめておきたい。

3 社会認識への視点

次に、社会福祉の課題を考察するとき人間と社会との位置づけと関係を明示しておかねばならない。そのことによって研究方法が分岐してくるからである。人間へのアプローチとしての実践科学あるいは支援科学か、社会へのアプローチとしての政策科学か、というオリエンテーションに分化するからである。いうまでもなく本小論は前者の人間理解への価値意識を根底にして、社会認識への姿勢や態度をまとめている。

機会あるごとに言及しているが、社会福祉の究極目標が人間の社会生活そのものの支援にあるわけで、施策や計画はそのための手段であり、また手段や方策は生きた実践のフィードバックを通じてはじめて整備・改善・改革が可能になるとのマクロの視野や発想を包括・統合したジェネラル・ソーシャルワークという立場からの論述である。

したがってソーシャルワークの実践や社会福祉の施策が、社会認識の相違によつて目的と手段とを交錯させることになる可能性をもつからである。そこで筆者の社会を認識する基本的な価値意識を整理しておきたい。

- (1) 社会は、発生的に多様な個々人の社会的行為の交換と、その歴史の上に構成される有機的集団であること
- (2) 社会は、家族という生活上の基礎的な単位を基点にして、広く組織を機能的・合目的に構成していること

- (3) 社会は、構成員の社会生活を反映した文化的・社会的・経済的・政治的な独自のシステムの上に構築されていること
- (4) 社会は、構成員の社会生活での価値と規範を反映した諸制度のもとに、新しい社会の再構成を目指していること
- (5) 社会は、構成員の諸要求に対応して、独自の構造と機能から社会を安定的に維持・統制する機能を内包していること
- (6) 社会システムへの期待や批判から、現実を否定した社会生活は成り立たず、生活過程を通じた構成員の参加と協働によって社会は変動すること
- (7) 社会は、構成員の地位と役割に基づく社会的行動を期待しており、構成員の理解と協力を通じて福祉社会は構築されること
- (8) 社会は、時代の要請に応えられるよう制度としての社会福祉を策定し、社会を調整できるシステムで構成されていること

とまとめ、構成員が社会を維持・向上・変革させる原点だと理解しておきたい。

社会が人間存在の意味や行動を規定するのではなく、人間の英知と努力の結晶が、社会を形成し、人間の生活を創造するという人間学的な発想を基点にしながら、社会をシステムとしてとらえ、マクロの課題もミクロである人間の社会参加と、そのフィードバック過程からアプローチをしたいという視点を明確にしておきたい。それは両者の主従関係を意味するものではなく、両者は相互に不可欠なシステム関係をもつということ、その発想の基点が人間であることを意味している。

4 実践への価値意識

次に実践をめぐる制度としての社会福祉と、ソーシャルワークの支援という概念理解からソーシャルワークに求められる基本的な価値意識をまとめておきたい。

- (1) 社会福祉は、科学技術や文化の恩典を享受し、健康で物心ともに豊かな日常生活を

努力して実現し、維持・継続していく状態を示す概念であること

- (2) 社会福祉は、一定の生活水準を基点に、個々人の生活要求を反映した相対的な概念と基準で理解され、対応が推進されること
 - (3) 社会福祉は、それを享受する人の意識と行動に基づき、権利として広く追求される施策であること
 - (4) 社会福祉は、自らの生活を自立・発展させる第一義的責任が、固有な生活を営む個々人にあることを前提にした方策であること
 - (5) 社会福祉に対して国家・社会は、そのための十分な条件整備と自立生活の支援をする責任を負っていること
 - (6) 社会福祉は、したがって与え受けるという姿勢が本来的なものではなく、自ら支え参加・協働・支援する姿勢が基本であること
 - (7) 社会福祉とは、人間の生活という生ぎまをトータルな生活の領域と内容という視野と発想で理解・把握しようとする生活支援概念から成り立っていること
 - (8) 社会福祉とは、特定の問題をもつた人のみを対象とするのではなく、広くより豊かな生活課題の回復と実現を目標にした積極的な概念であること
- と指摘できる。

これは社会福祉を構想する基本的な視点である。現実の社会に生活する人間の社会福祉を、権利・義務という関係や建前、観念から抽象化して理解するのではなく、あるいは課題を画一化し絶対化した基準から理解することでもない。自己の生活という相対的な状態から、人間の生活を人と環境が織りなす生ぎまとしてとらえる生活概念、生活主体としての人間と、それに対する国家・社会の支援責任などの視点を包含した積極的な実践概念として、社会福祉を理解したいと考えている。

もう一つ支援をめぐる価値意識に触れておか

ねばならない。福祉社会やノーマリゼーションの理念や思想を支える基本的原理が、価値意識としての社会福祉観といえるが、この概念を実践場面で具体化したものが、支援をめぐる価値意識である。

- (1) 支援とは、ソーシャルワークの中心概念であるが、その特性は、人間の社会生活を生きざまとして包括・統合的にとらえる生活の支援にあること
 - (2) 支援とは、発想の基点を利用者中心の固有な生活世界におき、生活状況に対処しようとする利用者の意志と能力さらに機会と努力を強化し推進すること
 - (3) 利用者中心の生活支援とは、必然的に固有な生活世界の基盤である家族中心的視点を重要視した方法で展開されること
 - (4) 支援の基本は、利用者と家族さらに社会環境をめぐり、生活世界のもつ課題解決能力の育成という自助を支援する特徴をもっていること
 - (5) 支援は、物的・財政的サービスの提供を通じた状況改善と併用して展開されるが、その中心は、対人サービスを主眼とした生活支援にあること
 - (6) 支援は、その目的を達成するために、何よりも一連の支援活動行為の積み上げからなる実践過程の展開を通じて推進されること
 - (7) 支援は、ソーシャルワークという実践活動を通じて可能になるが、支援の専門性・科学性は、実践過程を深化させた展開方法によって実証されること
 - (8) 生活支援は、学際的な専門領域の協働を必要とすることから、効果的な支援を提供できるサービスのコーディネーションに実践的特徴があること
- などとして、実践的な価値をめぐる課題を指摘することができる。

支援概念は、社会福祉の基本をなす原理ともいえるもので、一連の生活支援という固有な視

点、利用者中心と家族中心からなる支援の立場、自助の支援という支援特性などから構成されており、対人支援への焦点化、支援活動を構成する実践過程概念と支援システムなどから、ソーシャルワーク実践という方法論でまとめられている。このように支援概念についての価値意識をまとめたつもりである。

V 実践倫理をめぐる課題考察

ソーシャルワークをめぐる価値と倫理考察の前提課題、考察の視点と目的、ソーシャルワークの実践哲学としての価値意識などについての論述から、価値と倫理研究ということでは緒論を展開してきたつもりである。

価値と倫理研究の本論は、むしろこれからということになるが、ここではひとまず研究課題の提起をして締めくくりとしたい。そして自ライフワークと自認している今後の支援過程研究としてのソーシャルワーク実践研究の中で、必要な機会に、改めて本論研究を重ねてみたいと考えている。

1 実践倫理の根源

ソーシャルワークへの実践哲学は、画一化されるものではなく、教育研究者やソーシャルワーカー自身の学習や経験を通じて多様なものがあって当然である。しかし、このような自己の明確な価値概念が存在して、はじめて、他者の実存や自己実現を可能にする支援に参画できると考えられる。

ここで今一つ、前述の価値意識を支え、構成している本音の部分に言及しておかなければならない。如何なる先達や思想家の影響を受け、人間観や社会観、思想を得ようとも、それらの価値意識が与えられたものである限り、自ら専門職業者としての内発的動機や行動規範の必然性に結びつけるには、やや抽象的で観念的だといわねばならない。確かに社会的、倫理的、道徳的に他者の幸福について深い認識をもつことの意味は、重要で貴重なことであるが、少なく

とも筆者にとっては宗教的、霊的な価値認識への原体験なくしては、このことを語ることができないと実感している。換言すれば価値意識とは、与えられた理想や観念ではなく、原体験からなるアイデンティティの確立そのものだと感じている。

それぞれの人の人生には自らの価値意識を確立する経緯がある。筆者自身にとっては、原体験としてのキリスト教信仰に根源がある。神の意志によって創造され、生かされ用いられているという経験としての信仰で、その背景には、自らの存在の背景に贖罪意識という深い神の犠牲と許しがあることへの確信である。それに応えるべく当然人間として果すべき責任の自覚が根底にあってこそ、価値意識の根源を実感できると確信している。それは与えられ、学んだ思想や観念、人生観ではなく、神との出会いから経験し共感した信仰以外の何ものでもない。このようなところに価値意識の根底があると考えている。

2 実践倫理考察の課題

さて価値と倫理とは一体をなす概念として理解されているが、ソーシャルワークの価値を実践行為で具体化できる倫理という立場から、実践倫理が行為として存立する場面や状況あるいは対象や課題を二側面より整理してみたい。一つは実践行動としての機能や役割への期待という社会的声価からなる課題で、客観的な実践倫理の側面についてである。他方では、高度の専門職業ほど価値や倫理を厳しく問うところから、主体的覚知の課題という主観的な実践倫理の側面とである。それらについて実践倫理を考察するカテゴリーから基本・目的・原理・対象・方法などの視点で整理してみると、次のような

- (1) 社会的声価としての実践倫理として、
 - ①職業の社会的認知 ②社会的使命 ③社会的支援 ④利用者 ⑤同僚 ⑥実践機関
- (2) 主体的覚知としての実践倫理として、

- ①実践哲学 ②職業へのアイデンティティ
 - ③専門性 ④自己認識と統制力
 - ⑤実践行動力 ⑥属人的素性と宗教的信念
- などの場面や課題に分類できる。

前者の実践倫理のもつ社会的意義や役割は、支援科学としてのソーシャルワークについての研究・教育・実践の蓄積から歳月を経て確立されてくるものであるが、後者の課題は、専門職業者としてのアイデンティティの形成を問う主体的課題であり、われわれが日常的な場面で持続的に形成・錬磨・確立していかなければならない緊要の課題でもある。

もともと実践倫理とは、専門家としての主体性に必須の資質である。したがって教えられて直接身に付くものではなく、出会い与えられ機会あるいは歴史を経て蓄積された価値や遺産から情報を取捨選択し、自らの学習によって信念と行動規範の確立へと昇華されるものである。それはまさに専門職業者としての不動の自己自身からなるアイデンティティに他ならない。その目的は、実践倫理を自らの課題として把握・確立し、実践場面で具体化するための枠組や原理、方法や内容などを自ら学習し訓練することから、専門職業者として本音で利用者支援に奉職できる自己形成と価値意識の涵養を推進するものでなければならない。

3 実践倫理形成への視野

そこで、次に実践倫理の形成については、その内容や広がりをもどのように視野に入れておく必要があるのだろうか。とりあえず思想・理念や原理から規範・実践や方法として普遍化される実践倫理を考察する概念枠組みを整理してみたい。そして、教育研究者あるいはソーシャルワーカーの専門的実践行動に具体化する根底に問われる課題を、以下のようにまとめた。

- (1)〔前提〕 ソーシャルワークをめぐる実践哲学の構築
- (2)〔基本〕 信念に基づく態度や姿勢からな

る専門的実践力

- (3)〔認識〕 利用者の実存を理解できる専門的見識
 - (4)〔視座〕 人間中心主義から人間・環境よりなる生活世界への視野と発想
 - (5)〔自省〕 専門家としての自己覚知と自己統制力
 - (6)〔目的〕 課題解決と自己実現支援への課題認識と推進力
 - (7)〔方法〕 援助から支援への施策と方法を推進する科学的展開力
 - (8)〔過程〕 利用者との参加と協働を通じた支援過程の構成と専門的組織力
- ソーシャルワーク実践倫理の概念枠組みとして、まず最初に実践哲学の構築が大前提である。次に価値意識を実践倫理に具体化した行為としての専門的実践力が基本である。それから利用者を認識する知識としての専門的見識、人間理解への視座として生活世界という秩序ある固有なコスモスへの視野と発想が必要である。

さらにまた、専門家の内的な自省を深めるための自己理解や自制心も大きな要素である。ソーシャルワークの目的達成への課題意識や、利用者の自己実現と生活支援への実践意識も実践倫理の推進に不可欠な動機を与えることになる。それから実践推進への姿勢として援助より支援への方法をめぐる発想転換も実践倫理の一大課題である。そして最後に、実践を遂行する過程に利用者との参加と協働を可能にする支援過程の構成・推進力などに実践倫理の神髄が発現してきている。

4 実践倫理の教育と訓練

価値や倫理の意義あるいは特性を如何に詳細に分析・考察し、解説・評価しても、実践倫理が目指す実効に直結するわけではない。課題は、実践倫理を日常的な実践活動の中に如何に生きて働く実践力として具現化するかということにある。

そこで自らの実践倫理を問う姿勢を明確にし

なければならない。それは日本ソーシャルワーカー協会倫理綱領¹⁰⁾にも宣言をされているところである。これらの遵守はもちろんのこと、今一つ教育研究者やソーシャルワーカーの人間性の基礎に問いかけている基本的態度について、前述の実践倫理の枠組みに付言して指摘しておきたい。

それは、

- (1) 思索 — 人間や社会、物事についての深い観察と探求心
- (2) 認識 — 思索に基づく妥当な判断力と価値意識や思想
- (3) 自主 — 自由で責任ある意欲的な主体的態度
- (4) 創造 — 純粋で独自の価値実現への積極的態度
- (5) 参加 — 他者への理解と協働、豊かな感受性に基づく社会的自律性
- (6) 行動 — 信念に基づく態度としての価値実現への主導性と行動力

とである。

専門職業者に対して、改めて指摘するには、あまりにも僭越で常識的な課題であるともいえるが、わが国におけるソーシャルワーカーの社会的声価は、自負できるほどに高いものではない。人と環境に対する科学的な覚めた視野と暖かい関心、明確な価値意識に基づく思索過程を通じた判断力、自主的かつ創造的な専門的態度、価値実現への協働と態度の具体化など、再度自らに問いかけたい課題である。

そのためにはソーシャルワークの実践教育が重要であることはいうまでもないが、次のような教育の課題を指摘して締めくくりとしたい。

- (1) ソーシャルワーク実践の真髄教育
 - (2) 教育課程と教育方法・内容
 - (3) 教育研究と実践の点検・評価
 - (4) 教育研究・実践者の自己覚知と実践力
 - (5) 実践場面での臨床学習
 - (6) 社会生活場面での日常的体験学習
- 実践倫理とは、専門職業者としての厳密な実

実践活動規範であり、理想や信念に基づく意識や行動であるが、それは絵空事ではなく、厳しく自らに迫られる専門職業者の生きる姿勢であり責任ある行為を自覚することである。

Ⅵ おわりに

実践倫理とは、俗人としての自らとの闘いであり、また自ら専門職業者として生きている人生の証に他ならない。このような意味で、自らが生かされていることへの自覚や深い認識、そこから隣人や地域さらに人と環境への視野や発想を拡大することである。

そしてさらに、実践倫理は、論理や原則、方法や技術として how to もので教えられるものではない。魂の触れあいの中から、自ら経験し学び、試行し確かめて磨き上げる固有な信念であり、隣人の生活と平安を気遣う専門的な職業人としての態度である。そのような意味で個人的な実感としては、宗教的信仰に根源を発した人生の証としかいいようがない専門職業的良心であり使命感であると考えている。

注

- 1) Max Siporin, "Introduction to Social Work Prac-

tice," Macmillan, 1975, p. 65.

- 2) Eleanor R. Tolson, William J. Reid and Charles D. Garvin, "Generalist Practice: A Task Centered Approach," Columbia University Press, 1994, p. 34.
- 3) Maria O'Neil MacMahon, "The General Method of Social Work Practice: A Generalist Perspective," Allyn and Bacon, 1996, p.8.
- 4) Frederic G. Reamer, "Social Work Values and Ethics," 2nd. ed., Columbia University Press, 1999, p. 11.
- 5) Max Siporin, *op. cit.*, pp. 352-353.
- 6) Joseph L. Vigilante, "Professional Values," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel eds., "Handbook of Clinical Social Work," Jossey-Bass, 1993, pp. 58-60.
- 7) Frederic G. Reamer, "Ethical Standards in Social Work: A Critical Review of the NASW Code of Ethics," NASW Press, 1998, pp. 9-16.
- 8) Carol H. Meyer and Mark A. Mattaini eds., "The Foundations of Social Work Practice: A Graduate Text," NASW Press, 1999, p. 31.
- 9) 拙著「ソーシャルワーク実践とエコシステム」誠信書房 1992年 14-22頁
- 10) 福祉士養成講座編集委員会編 新版社会福祉士養成講座8「社会福祉援助技術論Ⅰ」第2版 中央法規 2003年 62-63頁